

漆工芸展—日常の彩り

【漆とは】

漆とは、漆の木に傷をつけた時、そこから分泌・浸出する樹液のことを指します。漆の木に傷をつけると、その傷口から乳白色の液体（漆）がにじみ出てきます。

中国では紀元前 4000 年ごろから漆を使っていたともいわれ、日本においても福井県島浜貝塚から縄文時代前期（約 5500 年前）に使われた漆塗の椀や盆が出土しています。漆とは、「うるわしい」「うるおす」という言葉が由来といわれ、外国では漆器のことをジャパンと呼んでいます。最初は接着を目的に狩りの道具・武具等に使用されていました。その後、漆の持つ保護耐久性・塗料としての利点を生かした、装飾の文化へと発展していきました。



樹液の採取は、樹齢 10 年以上のものを対象として行われます。10 年もので 1 本の木から 1 年間で 200 グラム程度しか採れません。これは椀を数個ほど塗る量に留まります。

樹液の採取は、樹齢 10 年以上のものを対象として行われます。10 年もので 1 本の木から 1 年間で 200 グラム程度しか採れません。これは椀を数個ほど塗る量に留まります。

【漆の木】

漆の木は、日本・朝鮮半島・中国などの東アジア、さらにベトナム・タイ・ミャンマーなどの東南アジアにわたって広く分布しています。日本では、九州から北海道まで広範囲に成育する落葉樹です。大きいものは、高さ 10m 直径 30~40cm にも達します。

6 月中旬に黄緑色の小さな花を咲かせます。雌花と雄花があり、風や蜂によって受粉し結実します。



【漆の精製】

漆の木から採取したままの漆は、木屑や埃などが入っているうえ、質が均一でなく、水分が多すぎます。攪拌機（かくはんき）でかきまぜながら、熱を加えて水分を少なくします。それが漆の精製です。精製することによって、漆の用途は広がります。木屑やごみをろ過したものを生漆（きうるし）と呼びます。

【うるしか漆掻き】

成長した漆の木の幹に傷をつけ、にじみ出てきた樹液を掻き採る作業を繰り返します。この作業を漆掻きといいます。この作業は、6 月中旬頃から 10 月下旬にかけて、天候と木の状況を見ながら行われます。中世では、漆は米・絹などと同様、年貢として納めなければならないものであり、漆の木の生え



ている場所と本数までも役所で調査・記録されていきました。採取した漆から木屑等を取り除いた生漆を攪拌して成分を均質にする「なやし」、加熱して水分を蒸発させる「くろめ」の作業を行うと、半透明の飴色で粘度のある精製漆になります。精製漆にベンガラ等の赤色顔料を加えると朱漆、鉄粉や水酸化鉄を加えると黒漆になり、朱漆と黒漆を使って多くの椀や鉢などが作られます。

【漆の乾燥】

漆の主成分はウルシオールという樹脂分で、フェノール系の物質。上等な漆ほどウルシオール成分の割合は高くなります。温度や湿度が高くなると、ウルシオール中に含まれている酵素（ラッカーゼという）が活性化し、空気中の水分から酸素を取り込み、ウルシオールとの酸化反応によって、科学的には網目構造の巨大な高分子を構成します。外見上では液体から固体へと変化します。この課程を「漆が乾く」といいます。漆の乾燥とは、水分が蒸発して乾くという現象でなく、酵素が高分子を作るということです。

漆が乾くためには、酵素を活性化させるために必要な温度(25度程度)と湿度(75%程度)が必要です。そのため、梅雨時の高温多湿の季節ほど酸化反応が促進するので、漆は早く乾燥します。雨天の日ほど漆は早く乾燥するのです。漆風呂（うるしぼろ）は檜や杉の板を貼って防塵、保温、保湿の効果を高める密閉構造になっており、漆の乾燥に最適な温度と湿度が確保されるようになっています。

【漆の塗り】

漆は、独特の質感や光沢を備えており、特有の美しさが日本人の美意識に合致し、多くの漆器が生み出されてきました。漆器は、素地を作る素地工程、素地を整える下地工程、下地面に漆を塗り重ねる塗り工程、漆面に文様をつける加飾工程という長く手間をかけて工程を経て完成します。



下地工程



弁柄漆塗り